

山口定先生追悼座談会

加茂 利男（立命館大学公務研究科）
水口 憲人（立命館大学公務研究科）
野田 昌吾（大阪市立大学法学部）

- I. 加茂 山口先生の思い出
- II. 水口 山口先生回顧
- III. 鼎談

I. 加茂 山口先生の思い出

野田：山口定先生が、2013年11月末にお亡くなりになりました。今日は山口先生の人と学問を振り返るということで、山口先生と古くからお付き合いのある加茂先生、水口先生にいろいろとお話を伺います。

では、加茂先生から、よろしくお願いします。

大阪市大での出会い

加茂：では僭越ですが、私から山口先生の思い出について、最初に総括的な話をさせていただきます。

山口定先生とは、考えてみれば長いおつき合いです。

私は1963年、大阪市立大学法学部に入学したのですが、教養課程の政治学の講義を受けたのが、山口先生でした。当時、先生はまだ二十歳代だったと思います。今思うと最初に山口先生に政治学を教わったことがその後の私の歩みに大きな影響を与えたと思っています。

大阪市大教養キャンパスの、殺風景な大教室で講義をききました。当時ぼくは家が貧乏で自活して大学にかよっていましたので、アルバイトばかりしていて、講義



の出席率は全般的にはあまりよくなかったのですが、山口政治学は相当真面目に出ました。他の受講生の出席率もよかったと思う。それは山口さんが、密度の濃いというか、コクのある講義をされたからだったと思います。

講義の組み立ては、猪木正道さんの『政治学新講』（1956年 有信堂）をテキストにつかったもので、歴史の話ではなく、政治学概論のスタイルでした。ただしアメリカ政治学はあまり出てこなくて、せいぜいハロルド・ラスウェルの『権力と人格』（邦訳『権力と人間』1954年 東京創元社）のようにのちの行動論のはしりになるような、政治心理学というかパーソナリティから権力を説明する理論も紹介されたくらいで、どちらかというよりはドイツ政治学の話が多く、権力論は、カール・フリードリッヒの「権力の実体概念と関係概念」やウェーバーの「職業としての政治」のような話だったと記憶しています。いまから見れば古びた話ですが、当時の学生には非常に刺激的でした。

なによりも強く記憶に残っているのがE・フロムの『自由からの逃走』（1951年 創元社）を使って、近代人の自由のディレンマのことを熱心に話されたことでした。もちろんフロムはフランクフルト学派に連なる人物でファシズム研究がベースになっていたのですが、山口先生はそれを近代化のディレンマの問題として、また大衆社会論につながりかたちで話され、当時の私はこれにかなりシビレた記憶があります。私は、1965年に市大法学部の『学生法学』という学生が運営していたジャーナルに3回生の時に「大衆社会とファシズム」という論文を書きました。これをゼミの指導教授の吉富重夫先生が評価してくれたのが政治学の道に入っていききっかけになったのです。1回生の時に聞いた山口政治学の影響が強く作用していたと思います。

当時教養課程で行われていた一般教育科目では、多くの先生が自分の専門研究のダイジェストみたいな話をする事が多く、学生には難しくもあり、専門のついでに教養科目をやっている印象があって、あまり面白くなく、政治学関係科目もそういう傾向がありました。ところが山口先生は、専門のドイツ政治史の話ばかりではなく、自分でも政治学の理論の勉強をして、政治学概論を講義しようと取り組んでおられた印象があり、講義の中身に緊張感があった。それが人気のあった理由だと思います。山口先生は当時まだお若かったのですが、風貌が老け顔で、話がゆっくりしていたので、風格がありました。特にジョークを言うわけではないけれど、話の中身の面白さでこの講義を楽しみにしていた人が多かったと思います。本籍は立命館大学で、大阪市大では非常勤講師だったわけですが、あれはきっとエライ先生なんだろうという評判がしきりでした。

同僚として

今思えば1回生で山口先生の政治学を聞いたことが、私の政治学への関心を引き出してくれた気がします。そういう意味で山口先生との出会いは私にはすごく重要だったのです。その山口先生が1971年に大阪市立大に移ってこられた。大学紛争後にはずいぶん教員の異動があったのですが、その一端だったわけです。私にすれば、山口先生から受けた影響は、まだ感触が

のこっていたので、何となく嬉しかった記憶があり、身の引き締まる感じがしたのを覚えています。先生は授業や会議の日以外はあまり大学に出てこられず自宅で勉強しておられたのですが、教授会の後の飲み会、懇親会などには律儀に顔を出され、いろいろよもやま話もされましたが、どっちかという聞き役でした。すこぶる生真面目で、羽目をはざされることはあまりなかったと思います。いつだったか法学会という教員の親睦会の懇親旅行で、夕食会の座がちよっと乱れてカラオケになったとき、先生もひっぱり出されたのですが、伴奏なしでベートーベンの第九の「歓喜の歌」をドイツ語で歌われた。すごい声量で迫力があつたのですが、ちょっとまじめすぎて笑えなかった記憶があります。20年あまり大阪市大の同僚として付き合い合わせていただいたわけですが、公的な問題では、慎重な態度を貫かれた人だったという気がします。立命館時代に大学紛争に巻き込まれ、教職員組合の委員長として苦勞されたそうで、市大に来てからはことさら控えめにされていたのかもしれませんが。

ファシズム研究

研究の面では、山口さんは市大にこられたころまでには、ファシズム、ナチズムの研究者としてつとに名をはせていていました。私が政治学を習ったときに、すでに『アドルフ・ヒトラー第三帝国への序曲』（1962年）という本を三一書房から出しておられて、講義の受講者の何人かは読んでいました。私は貧乏学生だったので人から借りて読んだのを覚えています。内容はあまり良く覚えていないのですが、冒頭にナチスが台頭するきっかけになったバイエルンの「ビアホール一揆」の情景が書かれていて、映画か小説みたいな感じがし、「ドラマチックやな」と思ったのだけはよく覚えています。

山口さんは講義では、ファシズム論そのものにはそれほど深入りされませんでした。丸山眞男さんの『現代政治の思想と行動』（1956～57年 未来社）をはじめ、篠原一さんや村瀬興男さんなどの本を断片的に紹介されました。しかし、実はすでにご本人自身が若手ながら一級のファシズム研究者への道を歩んでいたわけです。

市大に來られてからは、しばらくはファシズムを中心にした研究をされ、『現代ファシズム論の諸潮流』（1976年 有斐閣）とか、『ナチ・エリート』（1976年 中公新書）、『ファシズム』（1979年 有斐閣）などの本を次々に出されました。大学紛争後、市大に移って、いくらか落ち着いた時期に、ファシズム研究の集大成をしておられたのだと思います。

なかでも1979年に有斐閣から出された『ファシズム』は、ファシズム論の決定版みたいな本でした。ちょうどそのとき私はアメリカに留学していたので、ナマの印象は薄かったのですが、龍谷大学の石田徹さんからの手紙で、ファシズム論の集大成として評判になっているということを知りました。帰ってきてから読んだのですが、たしかにそういう感じを受けました。それまでのファシズム論は、ディミトロフ・テーゼに代表されるように、危機における資本主義の極限形態としてファシズムを規定するマルクス主義のファシズム概念や、「全体主義」としてスターリン主義と一括する考え方が対立し、イタリアのムッソリーニ主義とナチズムをごっちゃにしたり、全然別のものでしたりして何がファシズムの本体かわからなくするよ

うな議論が錯綜していて、ファシズムという言葉自体が有効なのかという懐疑さえでいたのですが、そのなかで山口さんは「ファシズムの時代」という大きな歴史的枠組みをつくって、ドイツ、イタリア、日本、スペインなどのファシズム現象を俯瞰しながら、クロスナショナルなファシズム像を描いてみようと言われた。今から考えると一大チャレンジをされたわけです。この本ではまだ近代化論におけるファシズム論は、ちょっと余談的な扱われ方でしたし、リンズの権威主義体制論などは本格的には取り上げられてはいなかったのですが、とにかく①ファシズムの歴史的・社会的基盤、②運動としてのファシズム、③思想としてのファシズム、④体制としてのファシズムといった、いくつかの側面・次元から比較ファシズム論を展開して、従来のファシズムをめぐる議論を乗り越えられた。たぶん日本のファシズム研究の新次元を開かれた本だったといまあらためて思います。

大阪市大法学叢書の一冊として書かれた『現代ファシズム論の諸潮流』は『ファシズム』を書くための準備作業で、従来のもろもろのファシズム概念を批判的に整理した本であり、同じく76年にだされた『ナチ・エリート』は、ナチのリーダーたちが性格的・階層的に多様な人々から構成されていて、思想や運動から体制へと進化していく中で、その構成が変わっていったことを論じ、ナチズムのダイナミクスを分析した本だったと思います。いずれもやがて『ファシズム』に結実する中間作品ないしバイ・プロダクトでしたが、一つ一つが面白い本でした。こういうファシズムをめぐる個別テーマでの研究の積み重ねが、『ファシズム』という包括的な研究につながったのだと思います。1970年代後半から80年前後の山口さんは、ファシズム研究者として脂が乗りきっていた感じがして、凄味があったと思います。

現代ヨーロッパ論への展開

『ファシズム』を書いて、ファシズム研究は一区切りと思われたのかどうかわかりませんが、山口さんの研究は、80年代になってその枠が広がり、1つはヨーロッパ論というか、ヨーロッパ史論というか、20世紀のヨーロッパをトータルに考える作業、2つ目に各国の政治体制を比較研究する比較政治学的な研究、3つ目に日本の政治を分析・批判する、時論的な仕事などへ多様化していったように感じています。山口定の名が新聞や総合雑誌などに頻繁に登場するようになったのはこのころからです。

ヨーロッパ論では、80年代におけるECの台頭をテーマとして意識しながら、それをヴェルサイユ体制成立以降のヨーロッパ史という視点から論じた『現代ヨーロッパ史の視点』(1983年 大阪書籍)や『現代ヨーロッパ政治史』1. 2 (1982~83年 福村出版)などを書かれた。たぶんミッテランやブラント、シュミットなどドイツ・フランスでの社会民主主義の台頭とECの成長が山口さんのヨーロッパ論を触発したのだらうと思います。朝日カルチャーセンターでの市民向けの講義をまとめた『現代ヨーロッパ史の視点』には、講義の意図をはっきりさせるためか、このころの山口さんの問題意識がわかりやすく表現されており、かつヨーロッパを考えるための論点やパースペクティブがいくつか設定されていて、単なる市民向け講義ではない内容でした。当時の朝日カルチャーセンターの知的水準の高さにびっくりする思いで

す。この本のサブタイトルは「今日の日本を考えるために」であり、80年代の日本で進展する経済大国化や保守化、ひいてはバブル経済や歴史認識の問題などを考えるための鏡としてヨーロッパを見つつ、同時にそういう視点から逆照射してヨーロッパの現代史そのものを描きなぞというモチーフがあったのではないのでしょうか。

20世紀の歩みを決定づけた両大戦（第1次大戦と第2次大戦）の原因、戦争としての性格・戦後処理などを比較した議論も面白いのですが、なんといっても20世紀前半における戦争や恐慌とのヨーロッパ各国の格闘のなかで、かつての世界の指導国家だったイギリスが、ファシズムとの対決の中で福祉国家を成立させながら、イギリス社会のなかにあった非近代性のために福祉国家そのものが行き詰まり「サッチャー革命」を生み出す。それに対して、戦後復興したドイツやスウェーデン、オーストリアなどで共同決定とか、コーポラティズムなどの体制が出てきて、アメリカ的な市場資本主義・多元主義ともソ連などの社会主義とも違う体制モデルが形成され、それがEC統合の進展とともに世界的な影響力を持つてくる動きに、ヨーロッパ研究者として注目されていたように思います。この視点が、1980年代に輸出競争力で「ジャパン・アズ・ナンバーワン」など言われて大国意識を募らせていた日本に対する違和感と重なり合って示されていたという感じがします。

こうした現代ヨーロッパ史論は、山口先生の政治学が、ファシズム研究から現代ヨーロッパ研究と比較政治学および現代日本論へ展開していったターニング・ポイントだったように思います。

こうしたなかでの新たな展開として、山口流の比較政治体制論がだんだん顔をのぞかせてきたと思います。山口さんの比較政治学は、比較ファシズム論から生まれ、アメリカの近代化論やリンス、レイプハルト、シュミッターなど、ヨーロッパから生まれてきた比較政治学の影響も受けていたように思いますが、60年代にはあまり強い関心を持っていなかったと思われるアメリカ政治学、特に比較政治学、近代化論や政治発展論をしだいに意識され、ご自分のファシズム論との距離を測っておられたのではないのでしょうか。いつでしたか日本政治学会でハンチントンの「政治的不安定」の理論を使ってファシズムを位置付けた報告をされたのを覚えています。これなどはファシズム論から比較政治学への学問的関心の広がりを示していたような気がします。

比較政治学への広がり

比較政治学での山口さんの業績といえば、なんといっても1989年の『政治体制』（東京大学出版会）ですが、ここにはアメリカやヨーロッパの比較政治学を総括的に勉強された足跡が表現されています。

『政治体制』をテーマにした本を書くというのは、山口さん自身のアイデアだったのか、政治学叢書の編者猪口孝さんのアイデアだったのかわかりませんが、「体制」を比較する理論をつくるというのは、学問的には一つのチャレンジだったのではないのでしょうか。「体制」というのは、「政治システム」のことだとすると、これはアメリカで生まれた政治システムないし

社会システム概念にひきつけられてしまう。この意味でのシステムは、イーストンなどが言っているように、すこぶる機能的・分析的な概念で政治行動のシステムということになって歴史の分析にはあまり有効ではなくなる。「体制」を「レジーム」のことだとするならば、これは「55年体制」などという言葉に象徴されるように、権力エリート、政党や官僚、集団などの勢力配置やヘゲモニーの様式という意味合いが強いのですが、この意味の「体制」はやや文学的というか、概念としてはアモルフで学問的に概念化されていなかったと思います。また、社会主義体制・資本主義体制などという社会構成体的な言葉が一般に流布していましたので、「政治体制」を政治学的な概念として加工しながら、現実に応用するというのはむずかしい作業だったに違いないと思います。

山口先生自身、この本の冒頭でイーストンの政治システム概念を検討しながら、それとは次元の異なる「政治体制」概念を浮かび上がらせる作業を苦勞してやっておられますが、その一つの結論として「政治システム」概念ではとらえきれない転換期の政治現象の動態や大規模な制度改革を分析する概念として、「政治体制」を考えたいという意図を述べておられます。ときあたかも「55年体制」の崩壊とか終焉とかが議論され始めていたところで、「体制」というちょっと古めかしくみえる概念を現実政治の分析に有効な概念として加工し直す意図があったことが読み取れます。

そのうえで「政治体制」を①政治の正当性原理ないし規範的構成原理 ②政治エリートの構成とリクルート・システム ③国民の政治的意思の表出・政策形成のメカニズム ④物理的強制装置の役割や構造 ⑤国家による国民の編成の仕組みという5つの要素からなるものとして定義し、これらの要素を分析・比較することで「政治体制」を描くという構想を示されたことはよく知られています。そのうえで「自由民主主義体制」を中心に、④の物理的強制装置を除く4つの要素ごとに、体制のさまざまなタイプ・類型を比較されたのが、『政治体制』という本でした。

こういう本は他になかったので、少なくとも政治学の研究者の間では、力のこもった野心作として受け止められたと思います。広くヨーロッパを研究され、アメリカ政治学を吸収された山口先生でなければ書けなかった本だと当時思いました。のちに建林正彦・曾我謙吾・待鳥聡史さんの『比較政治制度論』(2008年 有斐閣)という本が出ます。この本は「新制度論」に立ったものですが、ここでは「政治体制」という概念は用いられていません。アリストテレス以来の政体の分類論は、現代の比較政治学と共通する視点をもっているが、「政治体制」を独立変数として因果関係を説明することは難しいので、比較政治学の分析概念にはなりにくいとされています。たぶんこの指摘は当たっており、「政治体制」概念は、山口先生も5つの要素が織りなす複合的というかアモルフな政治のかたちであって、一国の政治の特徴を分類論的に説明するのに向いたもので、因果関係を説明し証明するのには向いていなかったのかもしれない。とはいえ、政治のパターン認識としては大いに触発されたので、我々の世代の政治学者はおおいに唸らされたものでした。

日本政治論へのシフト

山口先生の日本政治についての発言について振り返ってみます。山口先生は、思想的には紛れもなくリベラル派でした。大学の一回生の時に聞いた講義は、当時の大阪市大で流布していたイデオロギー丸出しの議論や講義と違って、思想的な抑制がきいた話で、ちょっとはぐれたマルクス・ボーイだった私なども安心して聴ける話でしたが、丸山眞男さんの『現代政治の思想と行動』などが随所に使われたリベラル派のトーンが流れていました。そういう山口さんの立場というか思想性は、80年前後からジャーナリズムに登場して発言されるようになって、表面に出てきたように思います。とくに当時の日本で表面化した経済大国化を背景にした新保守主義化、戦争責任の風化に対する批判が、そのころから頻繁に、新聞や総合雑誌に登場するようになった山口さんの時論的発言の基調になります。

そのころ山口さんが作ってほかの人にも使われた言葉に「生活保守主義」というのがありました。戦後日本が高度成長時代を潜り抜ける中で、はじめは石田博英氏の有名な「保守党のビジョン」論文が予測したように、「55年体制」のもとで、二大政党制的な様相が強まり保革対立から保革逆転に向かう傾向をうかがわせたのですが、経済成長とともに「大衆社会化」が進んで、村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎氏のいう「追いつき型近代化」の結果として「新中間大衆」という私生活志向の保守的な階層を大量輩出することになった。その結果、二大政党制が一党優位体制に変質して政治の保守化が進むことになってしまった。この保守化と重なり合って、経済大国化の結果として、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」ナショナリズムが生まれたというのが、三宅一郎・村松岐夫・進藤栄一氏との共著『日本政治の座標』（1985年 有斐閣）のなかで、山口先生がおそらく初めて書かれた現代日本政治論の観察だったと思います。先生は、さきにもた80年代ヨーロッパの政治的変化、社民の台頭、EC統合の進展、環境・平和・ジェンダー問題などでの市民運動の広がりなどに注目した視点から、日本の生活保守主義化にたいする違和感というか、批判意識を強められたように思います。それが、論壇・ジャーナリズムでの日本政治批判の発言を強めて行く結果になったのでしょう。

市民社会論

こうした生活保守主義批判のなかで、山口さんのなかに芽生えてきたのが「市民」あるいは「市民社会」の概念だったと思います。山口さんは、70年代までは、大塚久雄、川島武宣、丸山眞男さんらのいわゆる近代主義に好意を持ちながらも、ある程度距離を置いておられたように思うのですが、このころから俄然とくに丸山さんへの言及がふえてくる。ゼミで『文明論の概略を読む』（1986年 岩波新書）をテキストにされたりしたのもこういう「市民」論への接近の表れだったような気がします。要するに福沢の『学問のすすめ』の「一身独立して一国独立す」に表明されているように、個人が自由で独立した「私」の世界を作ることなしに充実した政府や国家はできない、頭でっかちな政治主義・「官」偏重では日本は文明国になれないんだという考え方を丸山さんが重視した、その感覚に山口さんは以前よりも強く共鳴するようになっていったのだ、と思われれます。また、ハーバーマスなどの公共性論の中でいわれた、公と

私の間にあった「市民的公共」世界など、欧米で1980年代あたりから広がってくる市民社会論を、近代主義とは違う現代的市民社会論として受け止める考え方が山口さんの中で強まっていった面もありました。

こうして、90年代以降の山口さんのキーワードは、「市民」「市民社会」に凝縮されていったと思います。

ここからあとは、端折った議論になって恐縮ですが、山口先生は1992年に『市民自立の政治戦略』（朝日新聞社）を、志を同じくする人たちと一緒に出され、その中で「新市民宣言」を提言されました。2003年には立命館大学人文科学研究叢書の一冊として『新しい公共性』（編著）を、また2004年には、『市民社会論』をいずれも有斐閣から出しておられます。立命館大学政策科学部の創設にかかわれたこともあり、「公共」とか「政策」という問題と二つ重ねて「市民社会」を日本の政治と政治学のなかに埋め込むことを大学生活での最後のテーマとされた感じがします。これらの本は、半分運動論・政策論・規範論のトーンがありましたが、さすがに山口先生らしく、一作一作丹念に、内外の文献や議論、主題をめぐる研究史などを検討された厚重なもので、常に全力投球で書かれていました。

そのエッセンスは、福沢の議論に触発されたかのように、公（官）一辺倒ではなく、「私」それも「自由自立」であると同時に「分限」を知る公共志向の「私」の世界の確立をもとめたものでした。福沢も「分限」とか「レシプロシテ」（互惠性）という言葉が意味するように、いわゆる公私二分ではなく、その間にあったはずの「市民社会」的な共同世界を念頭に置いていたと思われませんが、山口先生はこういうアイデアを掘り起こしたかったのでしょうか。これは、現実政治の世界でのNPO法成立や小渕内閣時代の「21世紀日本の構想懇談会」がうちだした「協治」概念 鳩山内閣時代の「新しい公共円卓会議」が提言した「新しい公共」概念などとも触れ合うところがあり、21世紀の日本社会のあり方を探求した作業だったと思います。山口先生の最後の著書となった『市民社会論』の「あとがき」に「私がいまどき着いた心境は、一口で言えば、今後は、家族の在り方を含めて『社会』の基本的なあり方の如何、したがってまた『政治文化』のあり方を正面から問わないような政治学はもはや意味がないのではないのだろうか、ということである」と書かれていたのは、とても印象的でした。

価値意識の表面化

こうやって振りかえってみると、山口先生は若いころのファシズム研究、壮年期のヨーロッパ史論を経て、日本政治論、市民社会論に行きつかれたのですが、どの時期にも丁寧な学問的議論を展開されたことは同じだったのですが、後の時期になるほど、価値意識が表面に出てきたように思います。議論の仕方が啓蒙主義的になってきたという人もいます。それは、ドイツやヨーロッパの研究はちょっと距離のあるテーマなので、客観的な議論がしやすい。それに対して日本について論じるときは対象との距離がとりにくいので、立場や価値意識が表出されやすかったということかもしれません。市民が確立しない日本社会へのいら立ちや阪神・東日本大震災で登場したボランティア活動やNPO法などに市民社会形成への希望をみるような発想

が、近年の山口先生の発言からはっきり読み取れました。

先生はたしかに最後は啓蒙主義的な発想に傾いて行かれたのかもしれませんが。研究者の間ではあまり価値意識が強く作用すると、学問としての客観性が後退するという考え方がありません。私も NPO 法が成立したとき、先生が「テレビのニュースでみて、思わず快哉を叫んだ」と言っておられたのを覚えています。それだけ、日本の政治社会への批判と改革への強い期待を持っておられたのでしょう。先に山口先生は「生真面目な人だった」といいましたが、私などは半分冷やかしか加減に「先生、なぜそんなに入れ込むんですか」といったこともあります。日本政治の動向に本当に一喜一憂しておられた観がありました。それが、転じて失望や慨嘆になり、国民へのお説教的な発言になったりすることもあった気がしています。ただ私は先に見たように山口先生が、啓蒙的な発言をするときにも、その前提として丁寧な学問的作業を最後までされたことに注目したい気がします。

福沢諭吉は「日本のヴォルテール」といわれ、明治啓蒙主義を代表する思想家だといわれました。『学問のすすめ』などは、慶應義塾を舞台に若者たちに「学ぶ」ということと、自主自由の精神を確立することを説いたまさしく啓蒙の書だったと思います。この本が累計 70 万部売れたというのは驚異的ですが、これは「蒙を啓く」つまり旧来の常識、ものの見方のなかにあった非科学的・非合理的な思考を打破して、より合理的な考え方を広げるという作用がはたらき、受け入れられたことを示しているのだらうと思います。福沢の書いていることの中にもずいぶん偏ったというか、過激な部分があって、必ずしも科学的であるとはいえない、価値意識が込められたちょっとアジテーションみたいな部分もあると思うのですが、それが多くの人の蒙を啓いた。一見思いこみの強いお説教みたいな発言が、多くの人の蒙を解く働きをすることがある。そうやって学問は発展していくのではないのでしょうか。山口先生の研究は、そういう意味で丹念な実証的研究を背景にしつつ、啓蒙的な作用も果たした研究だったのではないかと私は思います。

晩年のすれ違いの悔い

山口先生は 1993 年に立命館大学へ移られました。22 年続いた同僚としての付き合いは終わり、あまり出会う機会もなくなりました。また、私が 2007 年に大阪市大から立命館に移ったときはすれ違いで山口先生は退職しておられました。学会などでたまに会うか、年賀状のやり取りくらいになり、やがて私が大きな病気をして入院療養生活をしている間に先生も体を壊され、こちらから出した年賀状に奥様から返事があって、ご病気だと書いてあったので、奥様宛にお見舞い状を送ったのですが返事がありませんでした。間もなく奥様がお亡くなりになったという知らせをお嬢様からいただき、同じ年のうちに先生の訃報に接したのです。そのころ私はまだ病気の後遺症でほとんど京都から出ない生活をしていて、ご葬儀にも行けませんでした。

山口先生からの最後の年賀状は、2012 年のものだったと思いますが、立命館大学が混迷しているのではないかと心配されたメッセージでした。先生らしく「立命館民主主義の危機」と

いう言葉がつかわれていて、「先生、私には立命館の事情はよくわからないけれど、そういう面もありそうだけど、そうでない面もありそうですよ」と言いたかったのですが、その機会がないままに終わってしまいました。最後は先生とは本当に幽明を超えたすれ違いになってしまった感じがします。

野田：ありがとうございます。では続いて、水口先生、よろしくお願いします。

Ⅱ. 水口 山口先生回顧

大阪市大着任のころ

水口：それでは、何と申しますか、加茂先生の味わいがある話を聞いた後で、かえってやりやすく思います。山口先生は本当に影響力のある先生だと思いますし、いろいろな方がいろいろな影響を受けていますが、私もその影響を受けた1人です。そこで、今日は私がどのような影響を受けたかということを中心にお話をさせていただきます。ただ、これはきわめて個人的な経験なので、私の話がどれだけ普遍性があるかどうか分かりませんが、この企画は立命館大学政策科学部の企画で、私も政策科学部とは無関係な人間ではないので、何かの役に立てばという思いで参加させていただきました。

クリアカットにはいかないとは思いますが、3つの柱で話をさせていただきます。最初は、いささかしゃべりにくいのですが、しかししゃべっておいたほうがいいかなと思うことで、それは私の個人史のターニング・ポイントにおいて、つねに山口先生が見え隠れする方だということを、この機会にあらためて思いましたので、はじめにそのことをお話いたします。

2つ目は、これはもう先ほど加茂先生がほんとうに優れた報告をされたので、私はあまりしゃべることはないのですが、学問というか、あるいは学問への構えについて少しお話します。3つ目は、お人柄、広い意味でのお人柄について思い出を話したいと思います。

まず最初に、私の個人史と山口先生の関わりという、いささか手前みそな話になるかもしれませんが、私は大阪市立大学に採用していただいたのですけれども、その際、これは後から聞いたのですが、そのときの審査員のお一人が—加茂先生もそうだったかと思いますが—山口



先生でした。それで大阪市大に採用されたので、たいへん恩義のある先生のお一人といえるかもしれません。

今であればおよそ信用されないかもしれませんが、私は活字でない手書きの修士論文で採用されました。本当に牧歌的で良き時代だったと思いますが、ただしあとで山口先生にそうした雑談をしますと、当時提出した修士論文は書き直しを命じられていまして、「君の書き直し能力に注目して採ったんだよ」と言われた記憶があります。いずれにせよ、大阪市大に採用していただいたときの先生のお一人だったというのが、私にとっての最初の

ターニング・ポイントでした。

市大からの転出に際して

それから私は大阪市大で19年間おり、その後、大学を移ったわけですが、そのとき転職を反対されたら困る先生が—加茂先生を別にすると—私には2人いました。その1人は西谷敏という私の先輩です。しかし西谷さんはちょうどドイツに留学していたので大丈夫だと思ったのですが、もう1人、山口先生がおられた。山口先生に反対されたらどうしようという心配がありました。

結局、私が大学をかわるときいたとき先生はかなり驚かれたようでしたが、ちょうどそのころ川口清史前総長が大阪市立大学の山口先生の部屋に出入りしていて、立命館が新しく政策科学部というのをづくり、初代学部長にどうも山口先生を迎える工作をしているらしいということが分かった。これなら山口先生も私の転職に反対しないだろうと、私も大学を移る決断ができた、そういう思い出があります。

それから、私が立命館に移る際にも山口先生は最後の決め手になりました。私の2つ目の大学は龍谷大学だったのですが、そこでやっとお坊さんとも親しくなって、この大学でのんびりしようかと思っていたところに、立命館の政策科学部に移る話がきた。迷ったのですが、山口先生とともに田口富久治、宮本憲一という、私がお世話になった3人の方から「ぜひ来い」といわれ、最後は行かざるを得ないと思い移ったという経緯があります。とりわけ、そのとき山口先生は学部長でして、学部長からそういわれると、という気持ちがありました。そういうこともあって、立命館にかわるきっかけも山口先生であったかなという気がしています。

最後に、これはあまりいい思い出ではありませんが、私は立命館に来て3年目に政策科学部の学部長にされてしまったわけです。そんなつもりで政策科学部に来たわけではなかったのですが、私が候補に挙げられたとき、山口先生が申し訳なさそうに「複雑な、出来たばかりの学部で、こんなことをやってもらうために立命に来てもらったわけではないのに、ほんとうに申し訳ない」といったことをおっしゃられた。私も何で僕が候補なのか、とと思っていましたが、山口先生のその一言で意気に感じたというか、踏ん切りをつけて学部長になろうと決断したような記憶があります。そういう意味で、いろいろなところでいろいろな関わりがあった先生であったという気がします。

山口政治学をめぐる

2つ目は、学問のことです。実は山口先生が政策科学部で最終講義をされたとき、なぜか山口先生の業績を報告する役割が私に回ってきて、そのときに山口先生のお仕事を3点にまとめた記憶があります。

1つは、やはり、ヨーロッパ政治史についてです。歴史家としてたいへん優れたお仕事をされているということ。2つ目は、政治体制論、あるいは晩年の公共性論や市民社会論といった理論的な仕事について。ご本人も「歴史家と理論家の両方の顔を持っているんだ」というよう

なことをしばしばおっしゃっていた気がしますが、そのときは本当に刺激的な仕事をされていた。そして3つ目は、時論というか、評論というか、政策科学部の退職記念号の経歴のところにも、雑誌『世界』をはじめいろいろなところで発言されていると記されていますが、雑誌『世界』を中心にそのときどきの政治状況に対し、ほんとうに切れ味鋭い評論活動をされていた記憶があります。これも重要な仕事だと思います。

これは余談ですけども、ほんとうに売れっ子でおられて、もう二十数年前になるかと思いますが、漫才ブームというのがあったとき、恐らく『週刊読売』だったと思うのですが、漫才ブームについてもコメントされておられた。それで先生に「漫才なんて見るんですか？」と尋ねると、「いや、あの論稿を出した後で見た」とおっしゃった。山口先生らしいなという思い出ですが、手広く切れ味鋭い評論活動をやっておられた。これも重要なお仕事だといえるでしょう。

最終講義のときの紹介は、この3つを中心に山口先生の業績を紹介し、山口先生からも「よくまとめていただいた」とお褒めを頂いたのですが、4つ目としてあげますと、お弟子さんを結構たくさんつくられたということも、研究者として立派な仕事かなという気がします。

加茂：山口組という（笑）。

水口：そう。なぜかほんとうに、野田先生を例外として一と、一応、強調しておいたほうがいいと思いますが—キャラのたったお弟子さんが多くて、世間では山口組と称されているほどたくさんのお弟子さんがいる。これも先生のお仕事の1つとしてカウントしていいのではないかと思います。

学問スタイル

以上が、先生のお仕事に関してですが、あと私自身への影響ということであれば、学問というか、あるいは研究に対する構えやスタンスみたいところでほんとうに強い刺激を受けた気がします。いわば私自身が自分を振りかえる際の鏡というか、物差しみたいな役割を果たしていただいた先生かなという気がします。単純化しすぎかもしれませんが、最初は崇拜し、途中でやや違和感を持ち、最後はやはり偉い先生だなという思いをもった、これが山口先生の学問的スタンスから私が学んだことだと感じます。

自分の過去を語っても仕方がないのですが、私はかつて学生運動をやっており、ドグマティックなマルクス主義に毒されていました。そういう中で大阪市大に採用してもらったのですが、そこで山口先生をみると、リベラリズムというか、俗にいう進歩派のスタンスを崩さずに、長年、質の高い仕事をされているという印象でした。いわば学問を政治主義的にしか考えていなかった学生からすると、「こんな先生、おられるんや」という感じでした。その後、学生運動の名残りから、どこか進歩派というか、リベラルでありたいという思いと、学問のスタイルとの繋がりのようなところで、一つのモデルというか、偉い先生だなという印象を強く受けた。それは今でも変わっていません。

ただ、私も年を経て、山口先生のスタイルにやや違和感を感じるようになってきました。そ

のきっかけといいますか、それを自覚したのは、大嶽秀夫氏と山口先生との対談です。山口先生と大嶽さんの対談が『書齋の窓』であったのですが、それを私なりに解釈すると、政治学の世代交代といった観がありました。大嶽さんはファシズムという非常にユニークな社会現象を分析することに興味があるといったスタイルでしたが、山口先生のスタイルはファシズムような異常な社会現象をどこか阻止し、なくすために学問はあるんだという、そういう相違がある印象がありました。

当時、私は学問を政治主義的に唱えていた反動で、それこそウェーバーの知ることそれ自体に価値があるといったような、学問至上主義的な雰囲気に対し傾いていたときですから、心情的に大嶽先生に少し肩入れしたような気がします。そしてそのときに山口先生のスタイルがかえってよく分かったような気がしました。そういう意味では、山口先生のスタイルがあったがゆえに、自分の学問観を捉え直す一つのきっかけを与えられたといえるでしょう。

ただ、とくに立命館に来てからですが、何というか、リベラリズムの姿勢を崩さず、しかもきちんと水準の高い学問を一貫してやっていくという、そうしたスタイルは、私が年をとったせいかもしれませんが、学問と社会との関わりなどを考えるとやはり優れたスタイルであり、それを一貫してやってこられたというのは、ほんとうに偉い先生だなとふたたび思うようになってきました。

しかも、それを自分のこれまでの立場を繰り返すのではなくて、たとえば「新しい公共とは何か」といったような、時代や社会の変化に即しながら、リベラルな立場で学問される。そうしたスタイルがずっと一貫している。これはある意味ですごいことだと、私自身晩年になってあらためて尊敬するようになりました。そうした意味で、崇拜、違和感、あらためての尊敬という、そうしたサイクルが私の中には山口先生に対しあるような気がします。

政策科学部にきた当時、市民社会論とか公共性論を、なぜ今やられているのかなという思いがあったのですが、以上のようなスタンス、リベラルなスタイルを取りながら、何か社会に働きかけたい、学問として働きかけたいという、そのようなスタイルが新しいバージョンを迎えていたのかなという気がします。それが私にとって一つの鏡、あるいは物差しでした。

また、その他に研究のスタイルや構えといったことについてもいっておきたいことがあります。それは、私のような若い人間も含めて当時の同僚の業績を必ず読んでコメントしてくれたということです。

あるいはそれ以前に、たとえば私のヨーロッパ政治史の知識は圧倒的に山口先生から頂いた本からなのですが、同僚に自分の業績をきちんと与えられた。そして、同僚の業績に目をとおしてコメントされた。私はだから大阪市大というところに最初に勤めて、ほんとうに良かったと思っています。それが学部では当然だという感覚を身につけさせていただいた。collegeやcolleagueというのは同僚という意味があるのですが、そのことを感覚的に山口先生に教わったような気がします。

それから、たとえば私は3冊しか本を書いてないのですが、その最後に『都市という主題』（2007年 法律文化社）という本を書きましたが、これは私が学部長のときに山口先生の退職

記念号に書いた論文がもともとなったものです。その論文にコメントを頂いて、それがきっかけとなって、じゃあ、もうちょっとこのテーマを追求してみようという気になったというところがあります。節目、節目で、そういうコメントを頂いて、専門は違っても同僚の業績に注目され、コメントをいただけたのは、ほんとうにありがたかったという記憶があります。

それともう一つ、政策科学部での話を紹介すると、ある院生の修士論文の副査になっていたとき、その院生はそのとき歴史の研究をやっていたのですが、歴史家が資料を発見するときの楽しみのようなことを山口先生が淡々と語られていた記憶があります。私は山口先生を理論家だと思っていましたが、あらためて歴史家だったんだ、なるほどヨーロッパ政治史とかファシズム研究における先生の歴史家としてのセンスにはすごいものがあったなと、思い起こした記憶があります。

先生の人柄

最後に、お人柄についてお話しします。紹介したいエピソードはたくさんありますが、その一つに、大阪市大のとき、中核派と革マル派の俗にいう内ゲバがありまして、その余波を受けて先生方が近くの小学校の通学の安全のために、「緑のおじさん」、でいいのかな？

加茂：立ち番。

水口：立ち番というのを順番でやったことがあるんです。たまたま山口先生とコンビを組んだとき、中核派の学生ではなく、職業革命家と称した社会人だったと思うのですが、山口先生に「お前な、ファシズムって知ってるか？」と詰め寄った人がいました。私は横でもう笑いを押し殺したのですが、もし私だったら「俺はファシズム研究の権威や。俺の本、読め」と言うところですが、山口先生の対応はほんとうに印象深いものでした。「君が言わんとしていることを、ファシズムという言葉以外で説明してごらん。そうすることで、ファシズムとは、ほんとうに何かがよく分かるはずだよ」というふうに論ずるように注意された。さすがに偉い学者だなあという気がしたところがあります。その食ってかかった人は、結局、山口先生の本を読んだのだろうかとも今も思うことがありますが、ファシズム研究者としての、あるいは優れた研究者としての、山口先生の学問のスタイルといったものがほんとうによく分かるエピソードとして、ときどき人に紹介しています。

そういう類のエピソードは他にもいくつかあります。私は口の悪い人間だということになっているのですが、偉い先生に、本人の目の前に行って平気でレッテルを貼る癖があり、山口先生にもご本人から公認いただいたレッテルを貼ったことがあります。私は先生ご本人に「肩肘張ったデモクラット」というレッテルを貼ったことがあるのですが、ご本人も「そうですね」と納得していただいた。

ここで「肩肘張った」というのは、日常生活、あるいはデファクトのレベルでのデモクラットではないという意味ではなくて、理論とか生活スタイルにおいて、ある規範理念を念頭に置き、それを追求して理論化したり、そのような活動が行動のスタンスを決めているといった印象がすごくあった、それを表現したものです。僕なんか、「そんなことしたら疲れるのにな」

と思う性質なんです、そういうところが山口先生の持ち味かな、とつくづく思います。それをもう少し俗っぽくいえば—「肩肘張ったデモクラット」も結構、俗っぽい言い方ですが—「怒った顔が魅力的な先生」といえるような気がします。これも山口先生には言ったことがあります。

つまり、日頃はほんとうに誠実で温厚な先生なのですが、ときどき顔に怒りを表す。それは肩肘張っているからだと思うのですが、でもそのときの怒りというのはすごいメッセージを発していて、ほんとうに魅力的な顔になる。そういう場面を何度か見ました。そうしたお人柄だったと思います。

政策科学部の創設

それから政策科学部の関係でいえば、初代の学部長として立命館に呼ばれたとき、独特の思いで学部のためにほんとうに力を注がれたと思います、とりわけ学生が好きなんです。大阪市大の頃からそうだったのかもしれませんが、われわれは何度も「第一期の卒業生が卒業式で胴上げをしてくれた」とか、その第一期の学生がちょうど阪神淡路大震災の後にワットとみんなでボランティアに行って「ボランティアの表彰を受けた」といったことをほんとうに誇らしげに語っておられた。その話をほんとうに何度も聞かされた。そんなふうな学生に感動されているのをみて、先生はほんとうに学生がお好きなんだなと思ったものです。

また政策科学部に対する思いとしては、いろいろおありだったと思いますが、その1つとしては、インターディシプリナリイかトランスディシプリナリイか、そういった学部をつくるという思いで初代学部長をしておられた。私が赴任した頃、当時アメリカで policy sciences か policy science か、複数か、単数かといった議論がありました。そのことについて「何で単数にしたのですか？」と山口先生に聞いたところ、「いや、みんなが1つにまとまってほしいからだ」といわれた。これも山口先生らしい思いだと印象深く残っています。

また、先ほど加茂先生の話にもちょっとありましたが、山口先生は立命館と縁の深い方で、前の理事長の川本八郎氏が書記長をやっていたときに組合の委員長をやっておられ、その他にも大学の執行部を助けておられた。ただ、何というのか、大学執行部のほうも山口先生の持ち味とか良さというのを分かっていなかったし、山口先生もどこか距離感をとらざるを得ないような立場に置かれてしまったのではないかという気がします。そうしたなかで初代の学部長を引き受け、政策科学部という新しい学部をつくるため、いろいろとがんばられた。そんなふうないろいろあったけれども、ただほんとうに学生が好きで、学生と一緒に新しい学部をつくるため、よくがんばっておられたという気がします。

もう年をとると、あの世があるかどうか知らないけれども、あの世に行けば、もう一度山口先生にいろいろおわびしたり、もっと聞きたいことがあるなど、そういうふうな思わせる先生でした。

野田：水口先生、どうもありがとうございました。

Ⅲ. 鼎談

大阪市大への移籍をめぐって

野田：それでは、お二人の先生方のお話を受けて、これからフリーにお話していきたいと思えます。山口先生が大阪市大に移ってこられたのが……。

加茂：1971年。

野田：1971年ですね。そのとき、加茂先生は、もう既にスタッフの一員だったと思うのですけれども。

加茂：助手でした。

野田：山口先生を採ろうとか、そのときどういう話があったとか、そういう話は全然？

加茂：さすがに山口先生の採用にまではタッチしていない。

野田：水口先生が大阪市大に来られたときの話、山口先生との関係のお話は先ほど伺いましたが、水口先生が市大に来られたのは何年ですか？

水口：1973年だったと思います。ただ、言い忘れたわけではないんですけども、私が最初に山口先生とお会したのは京大の大学院生の頃、山口先生が後に『現代ファシズム論の諸潮流』という本でまとめられるような話の集中講義に来られたことがあるんです。私はその頃、あまり勉強していなかったので、ちょっとのぞいただけなのですが、大阪市大に行ったときに「あのときの君ですか」と覚えていただいていたので、却って感動した記憶があります。

加茂：多分、1年ぐらい後で来たんだ。

水口：そうか。

野田：そうなんですか。加茂先生のお話の中には、71年に山口先生が大阪市大に移ってこられた背景には、山口先生自身もどこかでおっしゃられていたと思うんですけども、大学紛争との関係というのがあったとありました。その当時のことというのは、お二人は何っておられますか？

加茂：とにかく、えらい目に遭ったという話は聞いているんです。当時、立命に来てそう経ってない時期に学生紛争が始まって、いきなり組合の委員長にまつり上げられて、それでその組合が全共闘の攻撃対象になって、それでえらい苦勞をしたという話を何回か聞いたことがあります。

野田：そうですか。これは先生ご本人だったか、あるいは他の誰かからだったか、ちょっと記憶にないんですけども、高野悦子の『二十歳の原点』（1971年 新潮社）の中に、これは明らかに山口先生のことがかかれていたという話があったのを、こちらに来る途中で思い出したんですけども、調べてくる時間がなくて。また機会があれば調べてみたいと思います。

幸か、不幸か、山口先生にとって「もうこのままだと研究者を続けていくことができない」という—そのような表現をされていたと思うのですが—、そういうときに大阪市大から声が掛かって移ってこられた。たしか、そういうお話をされていたと記憶しています。私は山口先生に大阪市大での学部ゼミと大学院で指導を受けましたので、私にとっては幸運でしたが、市大

に移ってこられて、そこでファシズム研究をまとめられたという意味では、山口先生にとっても幸運な転機だったのかもしれない。

市大での研究を垣間見る

ファシズム研究で一躍寵児になった山口先生ですが、ファシズム研究でいろいろなお仕事を次々に出されていた当時の山口先生というのは、周りからご覧になっていかがでしたか？

加茂：あの頃は、大阪市大はまだ大学紛争の余韻がずっと残っていて、しょっちゅう封鎖があったりしていた時期でした。ですから、われわれずっと居た人間にとっては、なかなか落ち着かなかった時期なんだけれども、山口先生にしてみれば、あの頃のひどく混乱した立命館から逃れて大阪にやってきて、それでとにかく週に何日かはちゃんと家に引っ込んで勉強できる時間ができたというのは、すごく貴重だったみたいで、だから授業の日以外はあまり大学に出てこないようにして、もっぱらファシズム研究のまとめとか、発展、集大成の作業をしておられたのだと、今にして思えば思える時期ですね。だから、山口先生にとっては比較的学問的には落ち着いた、仕事のできた時期だったと思う。

水口：今にして思えばですけども、私自身はあまり立命時代の話聞いた記憶がないんですね。山口先生も何かおありだったのか、あまり語りたがらなかったのではないかという気がしないでもない、憶測ですが。

それと、多分、野田さんからの質問に対するコメントになるとと思いますが、私はその頃、全然、学問していませんでしたので、山口先生が偉い先生で、どういう位置に居るのか、評価できる力がなかったんです。ただ何となく、政治学6人のスタッフの中で、当時、山崎時彦さんという最長老がおられました、その方がリーダーで、加茂さんとか私とその背後にいるという、そういう中で勉強していましたが、山口先生については、当時からごく自然に偉い先生だと思っていました。世間の評価も高くなっていく時代だったんじゃないかなかったですかね。

加茂：すごく慎重だった。控えめで、あまり前に出ない。積極的にあえて発言しようとはしない。そういう態度にあの頃はずっと徹していて、とにかく家で自分の勉強をするということに集中されていたような気がします。

野田：山口先生の経歴を見ると、東大を卒業してすぐに東大で大学院生や助手になるのではなくて、立命館に来ていますよね。その辺の事情というのは？

加茂：それはあまり詳しく聞いたことはないけれども、立命館に奨学金か、給与をもらって研究できる特研究生のようなポストがあったんだと思います。

野田：学部のゼミのときに、誰だったか、「先生、どうして研究者の道に進まれたんですか？」と聞いたんですよ、僕じゃないですけども。そのときに「いや、学部生のときは『運動』ばかりやってね」と言われた。



その質問をしたゼミ生が「どんな『スポーツ』をされていたんですか？」とたずねたのを、山口先生は笑って、それ以上、何もおっしゃられなかった。先生はいつも忙しそうにされていたので、われわれ周りの院生・学生もあまり立ち入って先生の学生の頃のお話を聞きはしませんでした。

立命館で研究生活を開始されて、ドイツ現代史の研究、それからファシズム論に移行し、そして市大でそれをまとめられたということですが、山口先生が『市民社会論』のあとがきの中で、ご自身の研究者としての歩みを3つの時期に区分されておられ、今お話ししたドイツ現代史研究、それからナチズム研究、比較ファシズム論研究への展開というのは、その第1期であるとされています。

その第1期に得た知識を生かして、日本とヨーロッパの比較政治論的な時評や政治体制論、ネオ・コーポラティズム論を中心とする政治過程論などもやるようになったのが第2期。そして立命館の政策科学部に移り、それとの関連で取り組んだ市民社会論あるいは公共性の研究が第3期であると、このようにご自身では自らの研究史を3つに分けておられます。

加茂先生には、ヨーロッパ論から比較政治学への展開ということについて先ほどお話しいただきましたが、ちょうど私が大学に入学したのが1983年です。著作目録などを見ると82、83年にヨーロッパ政治史の教科書『現代ヨーロッパ政治史』上下2冊を出され、83年に『現代ヨーロッパ史の視点』、それから私が山口ゼミに入った年ですが1985年には『日本政治の座標』というのを三宅、村松、進藤先生との共著で出されて、どんどん日本政治について積極的に議論されるようになった。この辺の転換というか、移行というか、研究の軸足の移行というものを、先ほど加茂先生から伺いましたが、このシフトについてはどのように同僚としてご覧になっていましたか？

ちなみに当時、私は大学生で勉強を始めたところですから、それについてどうこう何も思わなかったというか、むしろヨーロッパより日本政治のほうが身近ですから、面白いことを先生は話されるなど、『世界』をみるとときどき載っているし、そういう有名な先生のゼミにでも行こうかといったような、そういう気持ちでした。ヨーロッパ研究者ということではなくて、日本政治分析とか、日本政治研究、あるいは広い意味での政治学という、そうした広い意味での政治学者として山口先生を見ていました。私よりももう少し上の先輩からすると、山口定というのはファシズム論だ、あるいはナチズム研究だというのはありましたけれども、私などからすると、逆にそういうイメージは希薄になって、学部の授業ではヨーロッパ政治史をされているけれども、日本政治にも鋭い分析を加えられる有名な政治学の先生だというふうに見ていたんですが、同僚だったお二人からすると、こういう重点の移動というのか、あるいはテーマの移動というのか分かりませんが、それについてはどのように？ 先ほど加茂先生からはいろいろ伺いましたが、水口先生いかがですか？

水口：僕はそれについてきちんとコメントする能力もないし、また立場にもないと思います。また研究者というのは、ときどきテーマというのか、力点移動をするものだと思うので、むしろ野田さんが先ほど言われた「学生時代に『運動』をやっていた」という面から話をすれば、や

や結論めいたことを言えば、僕の世代と山口先生とはちょっと違う、何というか、先生は戦後啓蒙の最後の世代だったような気がするんです。

山口先生は極めて良心的な方だったと思うので、だから運動をやっている日本の社会を何とかしないといかん、というエトスをずっと持ち続けておられて、その上でいろんなことを考えて、日本の現実政治にも関心をもち、アカデミックな切り口で分析してみたいと思われたのかもしれない、という気がします。

それから、政策科学部に来て、「公共性」、「市民社会」について、何で今さら市民社会論をやられているのか、という気がした。これも雑談したときの思い出ですが、「先生、ヨーロッパ政治史やファシズム研究ですぐれた仕事をされているし、政治体制とかも書かれている。あと、政治過程論の本を1冊出してください」みたいなことを思い付きでしゃべったことがあるんですが、そのとき「それはもう、あちらこちらに書いている。結局、今は市民社会に興味がある」というふうなお答えがあった記憶があります。

だから、何というか、学生時代の—これは何となく追体験できるんですが—運動家、日本の社会を何とかデモクラティックにしないといかん、というたましいだけは一貫しておられた。研究者として関心や力点移動みたいなことは、当然あり得ると思う。ただ、絶えずアカデミックな水準は保持されているということが偉いところで、力点移動はなぜ起こったかと聞かれても、ちょっと答えられないところがあるんですが。

野田：それを周りにはどのようにみておられたのかな、と思うのですが。

水口：なるほど。

加茂：僕はどちらかという、とくに1回生のときに政治学の講義を聞いた印象が強く残っているせいかもしれないけれども、当時の大阪市大の教養課程の講義というのは、マルクス丸出しでアジェンションみたいな声が、結構、多かったわけですが、それに比べると山口さんの講義は、すごく抑制のきいたというか、この人、どういう立場の人なのか、よっぽど考えないとよく分からないような、そういう非常に慎重な、ことさら政治化しない、イデオロギー化しない形で、いろいろな政治現象を扱うような講義の仕方をした。

だけど、ときどき「私はファシズム研究をやってたんだよ」ということを、ファシズムというのは今世紀のたいへん大きな問題でそのことは自分の中に常にあるんだよということをちらっと出す。あとは、割合ニュートラルな政治学概論の話をしようというふうに関心していたというような印象が強い。

水口：わかるような気がする。

加茂：大学紛争との関係もあって、大阪市大に来てからも、自分とはにかく歴史家でドイツ史、あるいはファシズムについての研究をまとめるんだという意識が非常に強くて、目の前にある日本政治について、ときどき断片的に議論しているときに話をされることはあっても、それを表面に出すということは非常に慎重であったという気がするんです。ところが、ちょうど僕が2年間ぐらい市大にいなかった時期に、『ファシズム』という本を出されて、そこで一応ファシズム研究というのは、いろいろな側面から個別研究を積み重ねた上で、大体、体系化で

きたと思われたのかなという気がするんです。

そうしたこともあり、かつあの時期はほんとうに福祉国家から新自由主義への大きな転換期で、さらにヨーロッパでは EC 統合がかなり急激に進み始め、ちょうど日本とすれ違うかのようにヨーロッパでは社民が台頭してくる時代だったわけで、そういう世界の見取り図みたいなものを考え直してみようという試みが中間にあって、それが『現代ヨーロッパの視点』だったように思う。

あの本はヴェルサイユ体制以来のヨーロッパの歴史を、あんなふうに切るかという、ものすごく含蓄のある本で、いま有斐閣におられる青海泰司さんが、「ものすごくこの本は何回も、何回も書き直されて時間がかかったんだ」と言ってました。「こんなにやるもんか」というふうに感心してましたね。

ヨーロッパはこう変わっているということを追及し始めると、それとの対比で日本はどうだという問題に跳ね返ってくることになる。しかも視野がもうドイツだけではなくて、既に『ファシズム』の段階からヨーロッパ全体に広がっているから、考え方の枠組みが比較政治学的になっているんです。比較政治学あるいは政治過程論的な思考が拡大して、単なるドイツ史研究者の枠に収まりきれなくなった、そういう時期なんじゃないかな。

水口：さすがやな。僕は周延的な思い出話をすると—それはファシズム研究に対する思いを晩年もちょっと持ち続けておられたのかなと思うことですが—、政策科学部のときに「私、政策科学部で行政学って科目、持ったことないんです」という話を山口先生にすると、「実は、僕もヨーロッパ政治史という科目を持たされてないんです」というようなことをおっしゃった。これは先生は初代学部長だったから、カリキュラムにはあまり介入しなかったということかもしれないけれども。

それから、NHKで「その時歴史が動いた、ヒトラーとその時代」というテレビをやったでしょう。あのときほんとうに歴史家として楽しそうにしゃべっておられた記憶がある。若い頃、ファシズム研究を本格的にやった思いとか、蓄積みたいなのは、晩年も誇りに思っているというか、自信というか、自分のストックだと思われていたんじゃないですか。

加茂：だから意識的に、80年代になって日本研究とか、日本についての時論に力を入れてやろうと考えてそうだったとは思えない。

水口：流れ、みたいなものかな。

時代の転換と学問世代の交錯

野田：山口先生の危機意識みたいなものは、かなり強くなったのかもしれないですね、70年代末辺りから。『ジャパン・アズ・ナンバーワン』が79年に翻訳され、一方でヨーロッパでは英国病だとか、そういうことが言われ、日本はもうヨーロッパに学ぶところはない、あるいは日本は良い国である、良い社会であるという、そういう言説が日本の中で広く行き渡る中で、そうなのかという危機意識があった。だから違う形で問題を立てないといけないという、そういう思いがかなり強く出てきたんじゃないのかなと思うんです。それがほんとうに論争的な形

で現れたのが、85年のいわゆる山口・大嶽論争と言われるものだと思うんです。

今回の座談会にあたって、いくつか山口先生のお仕事を読み直してみたのですが、先生ご自身たしかに3期に分けておられて、視角でも、テーマでも、方法でも、どんどん変わっているというか、それぞれに違うのですが、それでいて実はかなり一貫しているところは一貫しているのかなという気があらためてしました。

例えば、『ファシズム』の最後のくだりというのは、近代化論あるいは近代化とファシズムといったテーマで議論されている。それから、最後の単著となった『市民社会論』なども、副題が「歴史的遺産と新展開」となっていますが、その「遺産」としてかなり議論されておられるのが、日本におけるいわゆる近代主義者の議論、あるいは近代というものを日本の社会科学なり人文科学がどのように議論してきたか、といったことについてです。そこには何か通底するものがあるんじゃないか。

さらに言えば、『政治体制』の中で政治体制をどういう概念として議論するかということについて、出発点にイーストンの政治システムの3分類—「政府」と「政治体制」と「政治的共同体」—を出されたりしていますが、そこにおいて政治学では政治的共同体というレベルでどのようなことが問題になるのかということが論じられている。それによると、「政治システムの規定たる社会の中の政治的アイデンティティのレベル」というのがその1つ、そしてもう1つが「政治意思の表出能力」、この2つが政治的共同体に関して問題にしなければいけない問題だとお書きになっているんです。

しかし、その本が出た後、雑誌『UP』に「政治体制雑感」という小さい文章を書かれているんですが、それを読み返してみると「これにさらにもう一つ付け加えたい」と書かれている。いろいろ整理して、分節化して、さらにこれを付け加えないといけないとするのは山口政治学の一つの大きな特徴ですが、「さらに政治的共同体の問題として、もう一つ付け加えておいたほうが良かったと後から思うのは、社会レベルの権力構造の政治的特質である」というふうに言われた。

この議論は山口・大嶽論争からつながっています。ポリクラシーという概念を山口先生が出されたことに対して、大嶽先生が「何いってるか分からない」と一そういう言い方はされていないですけども一、そういう問題の立て方はよく分からないと応じられた。また、この論争を読んだ東大の馬場康雄さんも、「よく分からない」というふうにおっしゃって、同様の反論はかなり出ました。しかし、恐らく山口先生としては、支配層あるいは政治体制の中の多元主義の問題と、社会が多元的であるかということとは別の問題であるだけでなく、この後者の問題を正面から問題にしなければならないのだといたかった。70年代の終わりぐらいからの日本はもうヨーロッパに追いついたとかいった議論がひろがり、社会レベルの問題を強調する必要をかなり強く意識するようになったんじゃないかなと、いろいろなものを読み返してみる中で、ちょっと思ったんですが。

加茂：『ナチ・エリート』に出てきますよね。

野田：そうですね。これは『市民社会論』の中でまさに正面から議論される点ですが、日本の

社会科学が非常に問題にしてきた近代の問題というのは、実は欧米の人からすると一欧米が近代化の本家だとすれば一特に自覚されていない問題かもしれないけれども、欧米を追いかけていく日本からすると、かなり大きな問題であって、そのように意識してきたからこそ日本における近代に関する議論には、かなりゆがんだイメージも含まれていたかもしれないものの、貴重な蓄積もたくさんある、そのいいところをわれわれは簡単に流し去っていいのかという思い、この点に関する違和感、またその点に関して無頓着に思えた今の政治学、機能的あるいは何と申しましょうか、概念を掘り下げたわけでもないような今の政治学に対する「概念一つ一つをもっとだいじにしようよ」という思い、そういった違和感をかなり持たれたのではないか。

先ほど水口先生が山口・大嶽論争には政治学の世代交代が現れているというふうにお話しされましたけれども、まさにそこにかかなり大きな違和感、新しい世代の政治学と山口先生ご自身の政治学との間の違いというものを、山口先生自身は感じられたんだと思います。

加茂：あれは多分、論争の場ではじめて、その違いを山口先生は意識されたというか、それまであまり気付いていなかったのが、気付かされたという感じがあったと思うんです。

僕は近代主義との関係でいうと、ずっと山口さんの講義を聞いてきた感じからいえば、どういふのかな、大塚久雄とか、川島武宜とか一丸山さんはちょっと別にして一、そういう戦後の近代主義者たちの近代論に対しては、わりと早くから違和感があったんじゃないかという気がする。それを丸ごと受け入れて、近代論を展開するという気は余りなくて、どっちかというところむしろ松下圭一さんの「大衆社会論」だとか、丸山さんの中でもそういった系譜に属するような議論がありますね。近代というものをすごく実体化して、近代が成立しそれから現代に行くんだというような、そういう考え方ではない、もうちょっと現代に引きつけた近代というか、そういったイメージを持っておられていたような気がします。だから、あまり大塚さんの議論や川島さんの議論を紹介したり、肯定的に引っ張ってくるような話には接したことがなかった。

もう既に高度経済成長に入りかけていた時期ですから、いわゆる日本における近代の達成という課題は、ほぼある程度までできているという感触を持っていて、その次が問題なんだという感覚があったと思います。それが、むしろファシズムの温床になる大衆社会状況みたいなものと重なって受け止められていたような気がするのです。だから丸山眞男さん以外は、あまり近代主義というのを強調されていたのを聞いた覚えが僕にはないんです。

ただ、確かに山口さんはもともとリベラルですから、リベラルとしての価値意識を胸の奥深くに秘めながら、それを沈殿させて、あまり表面に出さないように歴史研究に従事するというスタイルでやってこられていたのが、80年前後の転換期を迎えて、そもそも体制が変わりはじめているということにかなり触発され、危機感も覚えた。日本における新保守主義の台頭とか、学問や論壇のレベルでいうと「政策構想フォーラム」などが出てきて、日本の大衆社会的状況を松下圭一さんなんかは批判的に捉えるところからスタートしていますが、村上泰亮さんみたいに新中間大衆の形成として、どういふ方がいいのか、ヨーロッパ型、あるいはいわゆる市

民型というのではないけれども、大衆型で私生活を大事に考える、わりと保守的な態度の人たちが国民の中に増えてきているということ、日本の追いつき型近代化の成熟として肯定的に見るといふ、そういう見方が出てくる。

山口さんも、現実としてはそういうことなんだろうと考えつつ、それをどう見るかという点で「政策構想フォーラム」などとは少し違う感覚を持っておられて、ヨーロッパ、フランスやドイツの状況と比較をしながら、日本の問題点を浮き彫りにするという感覚が出てきたんじゃないかな、という気がするんです。そういう時期になって、これまでずっと胸の奥に隠していたような、そういう価値意識というのがドッと表面に出てくる。

水口：そうだな。

加茂：ファシズム論は一応、完成というか、体系化されたということもあって、メディアはファシズム研究者としての山口さんの日本に対する見方というのを追いかけて始めるわけです。そうすると、それに応えて日本に関する評論を、ヨーロッパを背景にしながら展開するという局面が出てきて、ドッと議論が拡大していくということになったのが80年代の前半かなというように思うんですけど。

水口：僕は、その問題はうまく整理がつかないという気がしています。加茂さんの話はなるほどなという気はしました。たしかに大塚とか、川島のような近代化論については明瞭です。「生活保守主義」とか、近代化の現局面、現代社会の現局面の概念について開発されたように。しかし、加茂先生もおっしゃられたけれども、たましいの奥底では近代化論みたいなどころがあるんじゃないかなという気がする。つまり戦後啓蒙。戦後啓蒙の良質の部分という感じがいつもする。

たとえば、僕なんかはもっと後の世代でもっとドライだけれども、山口先生の考えでは、いわゆるポストモダンとか、構造主義とかを一言で片づけているところがある。ある意味でくだらない議論だと。それは半分、当たっている反面、そういう現代社会の捉え方みたいなどころから何かをつかみ出したいというのが僕の感覚だったので、山口先生はえらくあっさり片付けているなという気がする。社会に注目しているけれども、社会って当然、いろんな議論がある。たとえばフーコー。そのあたり、意外とあまり議論していないのではないかな。

そういう意味では、どこか日本の近代化という、一つ前の世代の人たちが立てた問題を、ほんとうにある意味で誠実に受け止め、引きずりながら議論しているのかなという気がします。だから、僕も「何で今さら市民社会なんですか？」って、実に失礼な質問したことがあるんだけれども。

加茂：うん。確かに山口さんは、ポストモダンの話題に関する言及はほとんどない。

水口：ねえ。

加茂：関心もなかったかもしれない。ドゥルーズとかガタリとか、あんなのは恐らくそんなに読んでおられなかった、関心がなかったと思う。だけど、それは戦後啓蒙という枠組みの中で考えてきたがゆえにそうであったのかどうかは、よく分からない。

水口：たしかに。

加茂：日本では戦後啓蒙を乗り越えるものとして「大衆社会論」が出てきて、そこから例の「新中間大衆論」が出てきたりするわけで、そういう流れに沿いながら戦後啓蒙そのままでは済まない。

水口：たしかに昔の図式をそのまま引きずるような人ではなく、ほんとうに柔軟な方だけれども、たましいとしては最後まで引きずっているのかなと思うよ、学生時代のものを。切り口は「生活保守主義」とか、あるいは政治体制の「ネオ・コーポラティズム」「権威主義体制」のように新しい概念を使って現代政治の切り口を広く作っておられるわけだけれども、社会が多元化したほうがいいのか、市民社会とかいう土台のようなものに注目していくわけでしょ、最後は。これは何なんだろうなど。

加茂：近代化論への接近というのは、それなりに山口先生にとっても、何というか、学問世代の移り変わりを意識された展開だったのではないかな。もともとドイツ政治学を背景にしてずっとものを考えてきたわけでしょ。60年代というのは、いろいろな領域でアメリカ文化が一斉に起こるんですね。それまでの日本の社会科学がドイツの社会科学を背景にしてずっと形成されてきたのが、急激にアメリカが入ってきて、アメリカ流の社会科学に変わっていくわけです。

私なんかはそういう時代に学問の世界に入ったので、アメリカにちょっと関心が行くわけだけれども、山口先生もそのアメリカ流というのを分からないと、これからの議論はできないというふうに考えた節があって、70年代半ば頃からかなり意識的に、比較政治学とか、政治発展論、近代化論というのを勉強しはじめた。それで『ファシズム』のいちばん最後のところにも、近代化論によるファシズム論というのをに入れておられる。それは山口先生なりのアメリカ政治学のフォローアップの試みだったとは思うんだけど、でもまだそこでは余談的なんですよ。

水口：なるほどな。

加茂：ほんとうにアメリカ流の比較政治学みたいものをきちんと受け止めながら、比較政治学の枠組みをつくっていくという発想はまだ出てきていないですよ。それが多分、日本政治についていろいろな議論をしたりなどしていく中で、きちんとした比較政治学の枠組みをつくらないといかんというような問題意識につながって……。

水口：それが政治体制論になっていった。

野田：先ほど、山口先生はポストモダンとか、そういうことをあまり議論しないというお話がありました。『ファシズム』の岩波現代文庫版（2006年）が出たとき、後ろにそうしたことが少し書いてあったような気がしますが……。

水口：そうですね。

野田：でも、むしろ山口先生のスタンスとすれば、歴史研究から出発してますから、昔のというか、初期の近代化論の素朴な形態はもちろん問題外で、近代と前近代というふうに二つにスパッとどこの社会でも切れるものではないし、どのような社会、どのような国でも、近代的なものと同近代的なものが入り混じってる。そこで起きていることを見ないといけない、分析し

ないといけない。その分析の枠組みとして何が有効かということを考えないといけないというのが、恐らく山口先生のスタンスであつたろうと思うんです。ポストモダンについても、おそらく同じように考えられていたんだらうと思います。

日本もとりわけそうだと思うんですけども、近代的なものと同近代的なもの、あるいは近代を抜けていった現代的なもの、あるいはポストモダンといわれるものが、互いにどのような関係にあるのか、どのように入り混じっているのか、絡まっているのか。それこそが分析の対象であつて、一足飛びにポストモダンだとか、そういったことを論じてあまり意味がないんだというのが、恐らく山口先生のスタンスだつたんだらうと思います。

水口：やはり歴史家で、事実こだわってきて、仮説を作ってきたとは思ふだけども、私個人からいえば良質の構造主義やポスト・モダンには面白い切り口があるわけで……。

野田：勉強したほうが良かったということですか。

水口：それを山口先生が仮にしていたら、どんな議論ができただらうかという思いがある。

野田：歴史家と理論家というか、政治学者としての顔と歴史家としての顔という話ですけども、私の学部生時代からよく山口先生が繰り返し語られていたことに、政治史の方法という点にもかかわりますが、「今、自分が議論しているのは、あるいは自分がしている仕事は、歴史家としてなのか、あるいは政治学者としてそれをやっているのか、それを切り分けないとけない」というのがあります。「その切り分けを自覚的に、方法的に使い分けながらやる。でも、それはほんとうに相当、大変な作業で息絶え絶えになる」ということを、どこかの本のあとがきにも書かれていました。

水口：そういう方法的自覚はほんとうに明瞭な人だつたと思いますね。

野田：私は先生に連れていかれて—「いや、連れていったんじゃないよ」って山口先生は言われると思いますが—先生などが組織されたドイツ現代史研究会というのに参加していたんですが、そこにはみんなヒストリアンばかりですから、政治学者としていろいろな指摘をするわけです。「これにはこんな問題があるんじゃないか」とか。それでいて、市大でやっていた政治学研究会なんかでは、「歴史家としてはこうだ」とか、よく先生、おっしゃってましたよね。

加茂：あれはずるいの（笑）。

水口：使い分けるもんね、上手に。

野田：ただ、それが双方にとって一番実りが多いんだというのが、山口先生の基本的なスタンスのようで。

水口：それはよくおっしゃっていた。

野田：だから、山口先生の先生だつた篠原一さんが『ヨーロッパの政治』（1986年 東京大学出版会）というヨーロッパ政治史のテキストを、たしか僕が大学4年ぐらいのときに出されたと思うんですけども、あれが出たときに「歴史政治学試論」とかいった副題が付いてあつたと思いますが……。

加茂：そうだったかな。

野田：「歴史政治学」という言い方に対しては、拒否というところちょっと言い過ぎかもしれませ

んが、批判的なことをしばしば語られていたような印象がある。つまり、「政治学と歴史研究というのをそういうふうにいっしょにすると、一体、自分が何をやっているか分からなくなる。政治学としてやるのか、政治史としてやるのか、区別しないとイケない」と、そういうことをかなり言われていて、当時出たかなり評判をよんだドイツ政治史の研究に対するあるところで書かれた書評でも、「これは理論研究としては意味があるけれども、政治史研究としては問題がある」というふうに言われたりしていたことを記憶しています。

水口：若い世代に、山口先生のそういうところ、きちんと引き継がれているのだろうか。

野田：今、若い世代の話に飛びましたが、先ほどの水口先生のお話では、同僚の業績を読み、コメントをするところが偉いという、そういうお話がありましたけれども、私自身はあまりコメントしてもらった覚えがないんですよ、修士論文のときに。博士論文のときは、最終的に審査するので、いろいろな注文を紙に書いたものをもらうにはもらいました、最後には。私もある程度、無精で、あまり「今、こんな段階です」というふうにしよっちゅう持って行ったり、先生のところに話をしに行かなかったからかもしれませんけれども、とくに「こういう構成じゃダメだよ」とか、「もっとこういうのを読みなさいよ」とか、そういうことはほとんど言われずに……。

水口：そういうの、あまり言わない先生だったと思う。

野田：だから、何というのか、亡くなった上方落語の6代目・笑福亭松鶴、あの一門では「捨て育ち」と言うそうですけど、弟子にほとんど稽古をつけない—まったくつけなかったわけでもないみたいですが—結構、放し飼いの状態というか、それと似たようなものだったかもしれません。

加茂：「捨て育ち」というのか、それはいいことを聞いた。

水口：放し飼いやな。

加茂：僕もコメントされた覚えはほとんどないです。

水口：コメントしてもらった場合があるということと、その当時はきちんと読んでくれているという印象をほんとうに強烈に持った。

野田：ただ、同じ門下生でも、先生が関心のあるテーマ、先生自身が取り組んでいる研究とかなり密接な研究をされていた人とは、かなりいろいろとおしゃべりされて、ちょっとジェラシーを感じたような記憶はあります。私自身は、ほとんどそういうコメントをしてもらったこともなく、もう少し上の世代になると、修士論文を書いて—大阪市大は1月末ですよ、提出締め切りが—、大抵、冬休み前に先生に草稿を渡してそのコメントを年明けに聞くのですが、先生のご自宅まで行って、ご飯を食べながらお話しするといったようだったそうなのですが、私のときはそういうこともなかったですから、あまり披露するようなエピソードも持っていません。

水口：いや、コメントについて正確に言うと、上から目線のコメントではなくて、例えば山口先生が何か報告するとき、僕の論文を引用してくれている。「こういうの、目を通しているんだ」という、そういう感覚なの、僕からすれば。すごいなと思った。

加茂：松下圭一さんなんか知らぬ間に、僕の本を読んでくれている。

水口：そうだろ。

加茂：あれは偉い。

水口：だから、同僚というか、学部とはこういうものだな、という空気を身に付けさせてくれた先生の1人だ。

加茂：それは言えるね。

野田：あと、先ほどかなり盛り上がった議論で、水口先生の表現を借りれば、先生のたましいの奥底にあった啓蒙的というか、近代主義的なものが……。

水口：うん。啓蒙というか、戦後啓蒙派といわれる世代の良き遺産を最後に引き継いでいる人。しかし、単にその繰り返しじゃなくて、現実の社会に合わせていろいろ組み替えているという感じ。

野田：ともかく、そういうスタンス。加茂先生のお話では規範意識、価値意識が比較的表面に出てくるようになる、後になればなるほどそうなってくるということについて。その辺はいろんな議論が市大の同僚の間にもあったと側聞しています。例えば、山口先生が大阪市大にいた最後の時期に、たしか雑誌『世界』誌上で何人かの研究者と一緒に安全保障基本法をつくろうといった文章を出されたときとか。これにどの程度、山口先生自身がコミットされていたか知りませんが……。

大阪市大では「法政サロン」というのがあって、ワインなんか片手にちょっとアカデミックな話をしながら、ワイワイ同僚といろいろやりとりをするという、そういうのが今でもあるんですけど……。

加茂：今もやってる？

野田：今でもあります。最近ちょっと頻度が減ってますが、忙しくて。そこでの酒のさかなと言うと悪いんですが、そのときの話題としてその手の話が上ったということ、誰かからのまた聞きですが、聞いています。あるいは、山口先生の大阪市大での最終講義について、山口先生のご葬儀のときにご遺族の方がその抜き刷り—『法学雑誌』に載ったものですが—を、最後に皆さんに配っておられました。「戦争責任問題—ドイツと日本」というテーマでしたが、こういう戦争責任問題という、いわば価値といったものと非常に密接に関わるような問題を取り上げられたということに対して、いろいろ議論があったというふうにも聞いています。でも、お葬式の帰りに、頂いた「戦争責任問題」をあらためて電車の中で読み直してみました。単なる価値の表出とか、そういったものではない、まさに先ほど水口先生が言われたことと同じですけども、今でも通じるようなかなり重要な学問的指摘をされていると思いました。それが立命館の政策科学部に移ってこられたときに、「市民社会論」研究という形になるわけですが、山口政治学がそのようになっていったということ、つまり規範的なところかなりシフトするような形で議論するようになったということについて、学会での受け止め方はどうだったのでしょうか？

水口：学会については、僕は語るほどの学会通でなくなっているんだけど、ウェーバーのいう価値自由みたいなものを取り違えているんじゃないかという感じがする、最近の若い人

は。それはともかく、何ていうのか、「価値をカッコにくくって分析しろ」って、単純に言えばそういうことだと思っただけでも、しかしこの歳になって、それだけで学問できるのかな、という気がするんだ。

学問という独特の世界を通して、世の中とどこか関わらなければいけない。それが学問の通常のあり方ではないかと、かえってそう思うの。そうだとすれば、山口先生、偉かったなど。一貫して自分の価値観をストレートに出して鎧をつけたような議論をしているわけではないけれども、どこかで価値観をカッコにくくりつつ、分析し議論し、それを通して社会に価値的に働きかけるという、そういう独特なスタイルをつくられた人かなって気がする。

加茂：そう？ もう少しストレートに価値観を表明してなかった？

そういう色彩がだんだん強くなってきて、僕なんかは正直言って違和感を。

水口：おっしゃるとおり。政策科学部にいても、政策提言的なものが結構多くなった、『21世紀日本の構想』とか。あるいは、雑談の中で「日本の労働組合がシンクタンクつくればいいのに」とか、そういう政策提言的なものに対して、かなり価値的にコミットするような言説が多くなった。でも学問業績をとおして見れば、それだけではないというふうに思いたい。

加茂：何ていうのか、そういうことがあって、そもそも世代も違うし、方法意識もちょっと違うけれども、新たに登場してくる世代から見ると、山口政治学というのは規範主義的な、知識人の上からのお説教みたいに受け止める雰囲気、少しずつ出てきたといった感じを僕はもちました。

水口：なるほど。僕のいう、戦後啓蒙の最後の世代で良質な人という捉え方も、そういう雰囲気につながっているのかもしれないな。

市民社会へのコミットメント

加茂：まあ、よく分からないけれど、例えば日本人がヨーロッパの歴史をやっていると、それは過去、過去の外の世界ですから、距離感があるわけで、かなり客観的な議論の仕方ができるわけですけども、外国を鏡としながらではあっても日本のことを議論し始めると、距離感が失われてきたんじゃないかなという感じはする。

ただ、それでも山口さんの偉いところは、かなり入れ込んだ価値的な議論、批判的な議論をするときに、そのバックグラウンドとして、相当な学問的な材料というか、文献を読んだり、データを集めたりというようなことを、一作、一作されていたことです。その点はさすがに偉いところだと思います。

水口：今の話で思い出しましたが、『市民社会論』の書評を僕がやったの、政策科学部以外のところで。そのときに「山口先生、一度、知識人論を書いてください」というメッセージを出した。一般の知識人は、政策提言したり、時論を書いたり、評論したりするとき、自分の立ち位置みたいなものについてどの程度自覚的なのかと思って、丸山さんも含めて。山口先生なら、知識人の社会における立ち位置みたいなものを分析的に議論できるんじゃないかなと。ご本人も、そういったメッセージを社会に出すような知識人の1人だから。それで先生に書いて

くださいってメッセージ出したけれど、「は？」といった感じだった。

加茂：何ていうのかな、90年代ぐらいになると、日本の政治の変化のひとつコマ、ひとつコマを見ながら、一喜一憂してたという感じがするんです。それは逆に、ちょっとわれわれのほうが危機感が足りないというか、コミットメントの仕方が足りなかったのかもしれないけれど。

水口：そうなんだよね。

加茂：それはどうですか、野田さんから見て。

野田：どうでしょうか。それは、何というか、山口先生が言われるんだから、それは相当言わないといけないことなんだろうというふうに僕なんかは見てました。でも同じ言うにしても、語り口というんですか、『市民社会論』でもそうですけど、なぜそういうことが問題なのかということを、これまでのさまざまな議論に照らしてもある程度成り立つような表現というか、言説で語っておられるという気はしています。

私自身も当時はなぜ「市民社会論」なのかなという思い、なぜそこまで進んで行かれるのかとか思っていたんですが、あらためてこの機会に『市民社会論』を読み直してみると、ひじょうに説得的で、いままで自分にはこれを読む力がなかったんだと痛感しました。先生の他の本もあらためて読むといろいろと気づかされる場所がありますが、「戦争責任論」という市大での最終講義も、あらためて読むと、当時感じたのとは違って—当時はほんとうに価値の吐露のように思いました、その価値自体に私は別に違和感はなかったですが—、なぜそういうことをそういう形で言わないといけないと思ったのかということが、当時はいまひとつ理解できなかったんですが、あらためて読んでみると、よく理解できます。

加茂：とにかく切歯扼腕しておられた。

水口：そうだね。それは僕、偉いと思う。現世に絶えず関心を持って、何かそれを理解する理論の枠組みついたり、あるいは「思い」を出さないといけないと、ずっと思い続けた人だから。そうか、ポリティカル・コミュニティの延長線みたいな感じか、「市民社会論」は。

野田：そうじゃないのかなって。あらためてそういう思いで、いろいろ昔のものを拾い読みしてみると、そういう線でつながってるんじゃないのかなと思います。たとえば山口・大嶽論争でもそうですけど、日本の政治とヨーロッパのいろいろな国の政治、あるいはアメリカの政治、それほど違わないんじゃないのか。たしかに、いろいろな制度であるとか、法律であるとか、政治過程もある種そうかもしれないですが、いろいろな団体がいろいろな活動をして、それを受けて役所や議会で法律をつくってという、その限りで言えば、別に日本だってそんなに大きな違いはないといえなくもない。でも、お前の言ってることは素朴な印象論だと言われるかもしれないですけども、日本の政治と、たとえば私が勉強しているドイツの政治とは、何かが違うような気がする。じゃあ、その違いというのをどう言えばいいのかということを、ずっとこの間、個人的に考えています。

この点に関わって『市民社会論』のあとがきで、山口先生はこういう言い方をされてるんです。「私が今、たどり着いた心境は、一口で言えば、今後は家族のあり方論を含めて、社会の基本的なあり方の如何、従ってまた政治文化のあり方を正面から扱わないような政治学は、も

はや意味がないのではないだろうかということである」、こういうふう到最后を結ばれているんです。

加茂：それはさっき僕も引用しましたけど。でも、「もはや意味がない」という、その言い方が、何ていうのか、ちょっと気になった。

野田：そうですか。

加茂：危機意識というか、そういうような感じがして仕方がない。

水口：ほんとうにそうで、「何で市民社会論ですか」とやや突き放したのは、政治とか経済のベースとしての社会というのはたしかに分析に値するんだけれども、市民と言い切ることによって、市民の範疇に入らない人間が山ほどいるこの世の中でも、そういうひとを政治学的にどう救うかとか、市民概念を使って、どこか規範的な人間像を想定して、そういう人間が中心になる社会が望ましいといった規範主義がある。

そういう問題の立て方自体を皮肉っているところがあるでしょ、ポストモダンって。軽いのも相当あるけど。だから、自治と共和の精神を内面化した人間といった松下圭一のような—松下さんはそんなに単純じゃないけれども—、どこかある種の間人類型に憧れて、そういう人間の社会が望ましいというような、そういう啓蒙主義を感じる。

加茂：その種の議論はすごく有効で、リアリスティックなものになり得た可能性はあるわけですよ。オバマと民主党が出てきて、山口さんが想定していたような市民像が広がってきて、NPO法はできるし、情報公開法はできるし。

これまで明治以来、citoyenとかcitizenとかいった言葉を「市民」と訳しても、それが全然、普通の人々の思考とか、理論の中には定着していかない、そういう時代がずっと続いてきたところがあるわけです。中曽根康弘氏が言っているみたいに、「市民」という言葉は民主党流、鳩山由紀夫流のソフトクリームみたいな概念で、あれは山の手の「ごあます奥さま」とホワイトカラーにしか通用しない、そういう議論では日本国民はまとめていけませんよ、と。長屋の熊さん・八つぁんを含めた、いわゆる市民主義者の「市民」というカテゴリーからは漏れ落ちるような人々も含めて、それをどうするのという話をしないと政治にはならないよという、そういう感覚がまだ続いている感じがするんですね。

だけど、その一方で、山口先生が晩年の何冊かの本で期待されたような市民像みたいなものが、うっすらと日本の社会の中にも現れ始めてきているということも、また事実で……。

水口：そうなんだ。その辺り、どう思う？ それを期待されているのは分かるし、そういう人間になれたらいいなと思う反面、「俺、市民かな？」とも思うし。僕みたいな人間は、山口先生の理論枠組みに入って行動できるんだろうかといった感覚もあります、正直なところ。

でも、これもエピソードの一つだけけど、NPO法が出来たとき「日本の法律の中で初めて『市民』って言葉が入ったんです」って、えらく感動しておっしゃられてたでしょう。だから、市民ということにほんとうにこだわりがあるんだな。

野田：いや、僕も最初、分からなかったんですが、あらためて読んでみると、「市民社会」とは、公共空間というものでもないと言っているんですね。

水口：そうだね。

野田：公共空間というのは、その都度、その都度、出来上がった、そこに存在したりするわけだけでも、「市民社会」というのは、それともオーバーラップするけれども、互いに平等で自立した個人として出会い、そこで何か議論できる、そういうルール、そういうふうにしゃべるんだ、そういうふうに関わりを持つんだという、そういうものを「市民社会」と言っているんです。たしかに、そこには規範的な像が投影されていますけれども。

そうしたものがあるところでの公共空間と、ないところでの公共空間はまた違ってくる。ファシスト的公共性というものもあるわけですから。だから、みんなが偉い、立派な、いわゆる「市民」にならないといけないというふうにしておられたかどうかは分かりませんが、そういう主体論じたいはあまり正面からは言っていないように思うんです。

水口：いろいろな問題提起からみて、もうちょっと消化する必要がある魅力的な本だ、ということになるのかな。

人となりについて

野田：では、かなり学問に関することを中心にいろいろとお話してきましたが、あと人となりとか、その辺りはいかがですか。僕自身の印象としては、学部時代から眺めていますが、同僚として眺めるのと、学生として眺めるのとでは、かなりイメージが変わってくると思います。僕の印象は、何事につけても、すごくスマートに見えたんです、スマートとは何ぞやという話になるかもしれませんが。



水口：頭がいいという意味ではスマートだ。

野田：ええ。先ほど、市大に移ってこられた直後は、しばらくはかなり抑制されておられたというふうには言われていましたが、山口先生は学問の世界ではことあるごとに、理論とか、概念について、その射程といったことをかなり強調されていました。この理論はどのようなもので、どこまで使えるんだ、これに使えるのか、あれに使えるのか、とか。

自分自身に対しても、あるいは自分の行動一つ一つに対しても、自分が今やっていることはここまでのことだというふうに、かなり切り分けて一ドライといえどドライですけども、ある種、割り切った姿勢で、その割り切っていることを前提に、誰とでもという語弊があるかもしれませんが、かなり分け隔てなく、学生とでも付き合っただけで、それがすごくスマートだなという、そういう印象がすごく強くて、大学院に行ってるときに、もし先生になったら、そういうスマートな先生にならないといけないと思っていました。全然違いますけれども（笑）。

加茂：70年代ごろ、水口君や僕なんかは、学内にもめ事がある、紛争が起こっているという

ことになると、パーツとおっとり刀で飛び出して行って、首を突っ込むというようなタイプだったわけだけど、山口さんはそういうことは絶対にしない。

水口：しないね。

加茂：それで大学の役職でも、いろんな役職があるけれども、なるだけあまり引きずり回されないような役職に就こうとされていた観がある。もちろん、どうしてもやらざるを得ないということになれば、最後は逃げなかったのが山口先生らしいところだという感じはするんですけど。

水口：加茂、水口はアホだったわけ（笑）。だから、その文脈でエピソードを2つ言うと、さっき「法政サロン」という話があったけれど、加茂さんと僕がつくったようなもので、期待としては山口先生みたいな優れた方の話をあまり肩を凝らずに聞ける空間、そういう空間をつくりたいという、そういうところがあったんです。それと、野田さんは書かれているけれど、大阪市大に法学叢書ってあるでしょ。加茂、水口、西谷はそれを書いてない。気が付いた？

野田：言われてみると。

水口：山口先生がそれを気にされて、加茂、水口、西谷たちに、今、言った荒事の仕事を押し付けて、十分、研究できる機会がないから、彼らにも書けるような条件をつくってあげたいと音頭を取ってくれた、年上の先生方に。でも、そこからオチがあるんだけど、他の先生方も山口先生の提案に「そうだ」と賛成されたんだけど、そのためにはその3人が学部長とかしなくて済むように、だれかが代わってあげなければならないということになって、それでその話は結局ボショったってという話がある。でも、そういう気遣いをしてくれた先生であったという思いはすごくある。

それと、スマートだということに関連するかどうかはわからないけれど、「本質という言葉はできるだけ使わないようにするんです」ということをおっしゃって、僕もそれは学生によく言っている。実証の歴史家は、本質直観主義ではないし、安直に「本質」について論議はしたくない。だから、理論の射程で何が言えるのかということを中心に掛けている、ということでしょう。これは余談ですが、山口先生のお弟子さんに、短い新聞のコラムに「本質」という言葉5、6回も使っている人があって、「お前、山口先生の弟子か」ってからかったことがあるけど。それはいいとして、「本質」という言葉をほとんど使わないというのは、これは意識的だと思う。歴史家のセンスだと思いますね。

日本政治学会理事長としての山口先生

野田：山口先生は、政治学会理事長も務められていますますが、そのときのお話は……。

水口：それは、加茂さんが一番苦労されていると思うな。

野田：お2人から何かあれば。

水口：僕はほとんど。僕はやはり行政学がメインだと後で気が付いたけれど、加茂さんは苦労されたと思う。

加茂：あの頃は政治学会の事務局というか、理事長を東京1期、東京以外1期というふうにはバ

ランスを取って回り持ちでやるという—それがどれだけ民主的かどうか分からないけれども—、そういうルールが政治学会のエスタブリッシュメントの中であって、そのルールでいくと、1991年だったか、90年だったかな、その年は東京以外から理事長を出す必要があるということになった。それで、見渡したところ、どう見ても山口先生しかいないというので、そういう流れができたわけです。それで、そのように引き受けていいかどうかということについて、大阪市大の政治学のスタッフの中で相談したんだけど、僕は「こんな弱小大学で、とてもそんな学会の事務局なんか引き受けられない」と言って、あまりいい顔をしなかったわけ。

そうしたら、松下圭一先生に「どう見たって、もう山口さんしかやる人はおらんだろう。お前、ぐだぐだ言わずに引き受けろ」と怒られたことがあって、それでやることになったんです。たしかに、弱小大学があんなものを引き受けたら大変なことになるというのは、あの2年間で身にしみてよく分かった。何しろ幹事の一人は龍谷大の石田徹さんで、遠くにいたし、学内幹事の水口氏は、とても事務仕事でマメとは言えなかったし（笑）。結局大学院生に会員管理とお金の管理という日常業務をやらしてもらった。

とにかく、2年間、随分苦労して大変だったけれど、やったことはいい経験になったと思うし、それから山口さんは理事長として実務的なことは一切やらずに、われわれに全部任せたわけですけど、理事会の運営、チェアマンシップはきちんととって、いろいろ政治的にややこしいことを処理するのに徹してくれたので、それはそれでやりやすかったなどは思ってるんですけど。

水口：政治学会の理事長になるのにふさわしい人だったと思うよ、今から思うと。

山口先生のパソコン

野田：あと、山口先生が市大を辞められるときに、ゼミ生OBを含めて、送る会というのをやったんですけど、そのときに先生に何か記念になるものを贈ろうというので、先生は何が欲しいかなということで、「先生、ドライブが好きだけど、車、贈られへんしな」という話になって、結局、当時、かなり高かったレーザープリンターか何かをみんなで贈ったんですけど。

そのときに、いろいろと話を伺っていると、山口先生は結構、新しいものが好きで、電化製品、パソコンでもかなり早くから使われていたようですが、よくそのパソコン絡みでは水口先生のお名前が山口先生から出て……。

水口：いや、いや、昔そうだったね。

野田：動かなくなったとか。

水口：僕、昔、パソコンが得意で、山口先生のパソコンをだいぶ直した記憶がある。

加茂：夜中、電話がかかってきたんやろ。

水口：うん。電話がかかって、「これどうしたらいいか」って。

野田：このキーを押してくださいとか。

水口：そうだな、昔は僕、スキル高かったんだと思うよ。

それから、何ていうのか、鹿児島県出身であること、意外と誇りに思っているところない？

野田：飲み会、コンパのときでもよく。

水口：東大生になったとき、鹿児島県人会の寮に入ったことを楽しそうに話してたり。「鹿児島男児」という風貌というか、行動をするときあるね。それをスマートと言えるかどうかかわらないけれども。

晩年の山口先生

加茂：僕は最後の数年間については、ちょっといろいろ悔いが混じった思いが残っている。僕が立命に来るのと山口さんが立命を退職されるのと、ちょうどすれ違いみたいな格好になって、結局、ここでは同僚として付き合うことがなかった。学会でたまに会うことはあったけれど、ほとんど話はちゃんとしなかったし、新しい本が出たりしても、それについていろいろ議論するという機会もほとんどなくなっていった。山口先生自身が奈良のご自宅に引っ込まれて寂しがっておられたという感じはしたんですが、私の方にコミュニケーションをとる余裕がなかった。

年賀状は、毎年、来たんだけど、そこにはかなり熱烈なメッセージが書いてあって、大概、立命館のことを心配されていた。

そこまでいろいろ心配してくれていた山口先生と、晩年はほとんどコミュニケーションがなかった。僕が病気になるのと山口先生が倒れるのと、同じような時期で、最終的にはもう直接、言葉も交わすことができないまま亡くなられた。その前に看病されていた奥様が先に亡くなって間接的なコミュニケーションもなくなったという、最後のすれ違いをしたことは、非常に心に残っています。

水口：ほんとうに偉い先生で、さっきも言ったけど、年をとると、あの世なるものを考える。阿弥陀さんの世界は行きたくないな、楽しくないだろうなとか、どうでもいいことを考えるんだけど、あの世があれば山口先生にもう一度お会いして、いろいろとお話したいなと思わせる人だったということかな。それは事実です。

加茂：今から追いかけたら？

水口：間に合うかもね。しかし、お会いするにしても、先生について、あらためて整理したり、咀嚼したりする準備の期間が、もう少しほしいということかな。もうちょっと時間、置いておくわ。